

学術調査型体験発掘の実施とその意義

高橋 浩二

第2次調査の実施に合わせて、平成13年12月1日、2日、氷見市阿尾島田A1号墳において、「北陸日本海王者の謎にせまる—ハイテク考古学・古墳発掘に挑戦—」と題した中高生向けの体験学習を実施し、高校生4名と中学生2名が参加した。これまで県や市町村主催の発掘体験、また学校単位による野外での歴史授業や「14歳の挑戦」のような社会学習としての考古学体験等の試みはあったが、大学の専門コースによる取り組みは全国的にも例をみないことここに紹介するとともに、活動の目的と意義について述べてみたい。

1 発掘体験学習の目的

第一に、教科書では味わえない歴史をより深く学び取ること。例えば、古墳築造にどれだけの盛土や労働力、技術力が必要であったのかは現場で汗を流してはじめて理解できることである。当時の生活や習慣、思想などにできるかぎり近づくことは、その時代の特徴を把握するのに役立つ。

第二に、歴史の追体験を通じて、地元にある文化財を知り祖先の存在を認識すること。これは、文化財愛護の精神ばかりでなく、遺跡保存の重要性、そして郷土愛を高めることにもつながっていくと思われる。しかしながら、ここまでなら、既に実施している自治体や学校、団体等も多いことだろう。

特徴的なのは次の第三である。つまり、研究上重要な調査に参加することによって、青少年の勉学意欲や研究意識を醸成し、未来の研究者や教育者、技術者を育成することである。従来の体験発掘の多くは考古学の面白さ、フィールド・ワークへの興味だけを強調するいわばきっかけ作りの場であった。しかし、私たちの企画は、発掘の厳格さも地道さもありのままを経験し、学術調査の緊張を体感することにこそ重点をおいている。

2 阿尾島田A1号墳とは

本書の調査成果やまとめでも記述したが、対象とした古墳について、あらためて簡単にふれておきたい。古墳は1999年11月に発見、その後の測量や小規模発掘によって前期古墳と判明、全長約70mで県下最大の前方後円墳と推定された。もし前方後円墳であるならば、同じ氷見市にある全長107.5mの柳田布尾山古墳の成立背景、つまり近畿地方の古墳にも引けを取らない巨大墳丘を築くまでに至った過程を探るうえで重要な意味をもつ。そこで、第2次調査においては、前方後円墳の確認を最大の目的に、想定くびれ部にメスを入れ、墳丘形態を見定めることにした。地味ではあるが肝要な調査と言える。

3 体験発掘プログラム

素人同然の中高生を学術調査に参加させるには当然ながら抵抗がある。そこで、現場体験に備えて、当日三つの講義を用意した。

- (1) 「ハイテク考古学って何?」(酒井英男:富山大学理学部)は、古墳発掘における最先端の科学的探査法を紹介した。特にレーダ波を利用して地下構造を調べる技術の実技指導を行った。
- (2) 「大和の王の墓」(高橋克壽:独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)では、大王墓を通して

て、古墳とは何か、古墳時代社会の全体像を見渡し、合わせて本場近畿における研究の最前線を学ぶ。

(3)「北陸の王の墓」(高橋浩二)は、畿内との様相の違いについて解説し、地方から古墳時代像を見なおしていこうという視点を説いた。

これらの室内講義の後、野外での、いざ発掘という場面では考古学専攻生が道具の使い方や掘り方を指導し、各参加者に対して大学生1名が付随した。

作業終了時の現場ミーティングでは、「地層の違いがどうして分かるのか」、「古墳とただの丘陵高まりをどのように識別するのか」、「墳丘規模はどのようにして測るのか」、など生徒から質問攻めにあった。素朴な疑問ではあるが、一応の知識、問題意識をもって発掘にのぞんだ成果と思われる。

4 生徒たちの反応と実施の意義

残念ながら前方後円墳を決定付けるくびれ部は明確に検出できず遺物も出土しなかったため、最終的な判断は次回への持越しとなった。それにもかかわらず、感想は悪いものでなかった。後日行った無記名アンケートでも、「さらに興味がわいた」、「また参加したい」という意見が目立った。発掘の苦労、考古学の険しさ以上に、謎を紐解いていく楽しみ、講師陣や大学専攻生と目標を共有できた喜びや誇りが実感できた証と言えるのではなかろうか。学校や年齢、異性の枠を越えた仲間意識や情報の交換など、同世代の交流もプラスにはたらいたと思われる。これこそ学術調査型体験発掘ならではの醍醐味である。

一方、主催側もまた活動を積極的にアピールできたことは大きい。大学法人化、そして少子化へとむかう時代、これから受験にのぞむ中高生に、活動内容や専門性を早くに知ってもらうことはもっとも大切である。また、発掘現場をできるだけ開放することによって、旧石器ねつ造事件で失墜した考古学の信用を取り戻す狙いもある。

今回の取り組みは、夏休みに開催できなかったこと、学校やマスコミへの周知が遅れたこと、天候が悪かった場合を想定して室内作業も用意しておかなければいけないこと、など改善の余地を多く残すが、ここで行った体験は中高生ばかりでなく、私たちにとっても意義深いものとなった。



発掘調査参加者